

平成 27 年度における学問基礎科目相関図の効果検証

齊 藤 和 也（経済学部教授）
中 村 丈 洋（医学部准教授）
鶴 町 徳 昭（工学部准教授）
三 宅 岳 史（教育学部准教授）
佐 藤 慶 太（大学教育基盤センター准教授）

1. はじめに

調査研究部では、新入生が授業に対して幅広い関心を持ち、授業科目相互の関連性について意識を持った上で受講登録を行うためのツールとして「学問基礎科目相関図」を作成し、平成 25 年度のシラバスにこれを掲載した。相関図に関して、平成 25 年度に、「相関図の認知度」を主眼とした調査を行ったが、これに加えて、「学問基礎科目相互の関連性の理解度」や「授業相互の関連付けの意識度」が「相関図の認知度」とどの程度の相関があるかということについても調査を行った。その結果、相関図の果たす一定の役割を確認することができた。また、「相関図の認知度」を高めるための方策に関する提起も行った。このことについては、平成 26 年度の調査により、認知度を許容レベルにまで引き上げることができたことが確認された。本年度は、このことを受けて、「相関図は認知しているが参考にはしていない学生層」に対してその理由を回答させ、参考度のレベルを引き上げるための方策を考えるデータを得ることとした。

また、平成 26 年度に引き続き、共通教育スタンダードの認知度についても昨年度と同様の調査を実施した。さらに、平成 26 年度から開始したリーディングリストの利用状況についても調査を行った。本論は、これら 3 つの事項について行ったアンケート調査の結果を分析したものである。

2. 調査の概要

2-1. 実施方法と設問

調査対象は、平成 27 年 10 月 27 日（火）、11 月 10 日（火）の 2 校時、10 月 29 日（木）、11 月 12 日（木）の 1 校時に、学問基礎科目、主題科目を受講している学生である。授業担当教員の協力を得て、授業時間内に調査票を配布し、回収を行った。回答者数は、1094 名であった。次節以降で詳しく見ていくが、アンケートは、全学共通教育スタンダード及び関連項目の認知度（問 1～4）、全学共通科目相関図の認知度（問 5～8）、リーディングリストの認知度及び利用状況（問 9～問 11）、履修計画を立てる際の検討材料（問 12～14）、授業相互の関連づけ（問 15）についての設問からなる。

2-2. 昨年度からの変更点¹⁾

昨年度からの変更点は、主に3つである。第一に、新たな試みである「リーディングリスト」²⁾の認知度、利用状況についての質問項目を加えた（問9～問11）。第二に、全学共通相関図の認知度に関する設問に変更を加えた。昨年度のアンケートでは、相関図の認知度について問い（回答は、「知っており、参考になっている」、「知っているが、参考にしていない」、「知らない」の3件法）を設定していたが、この質問からだけでは、「知っているが参考にしていない」を選んだ学生が、どのような理由でこの選択肢を選んだのか（十分に読んでいないのか、難しすぎるのか、役に立たないとみなしたのか）、読み取ることができなかった。そこで今年度のアンケートでは、この問いで「知っているが参考にしていない」を選んだ学生を対象に、さらに「なぜ参考にしていないのか」を訊ねる項目を追加した。最後に、形式的なことであるが、アンケート用紙をA4裏表1枚のものから、A3表面のもののへと変更した。これは昨年度、後半の設問の有効回答率が下がっていることの原因として、裏面があることに気付かなかった、あるいは裏面をあえて答えなかった学生が相当数いることが想定されたためになされた。

2-3. 回答者の属性分布

表1は、回答者の学部別割合、学年別割合を示したものである。調査学生数は昨年度より59名多かった（昨年度の回答者数は1035名、今年度は1094名）。

表1 回答者の属性分布（計1094人、カッコ内は現員数。1回生のみ提示）

所属学部等	2015年度入学	2014年度入学	2013年度入学	2012年度以前入学
教育	191(203)	5	7	6
法	127(167)	26	5	5
経済	272(297)	7	7	5
医	82(173)	1	6	1
工	238(276)	2	5	4
農	88(154)	0	0	0
科目等履修生	3	0	1	0

昨年度から実施曜日に変更はないが、木曜日の調査対象校時を5校時から1校時へと変更した。昨年度の問題（学部別に見た場合、農学部、医学部の学生が少ないという問題）は、やや解消されているといってよい。昨年度は、各学部1回生の現員に対する1回生の回答者の割合が、教育、法、経済、工の4学部において80%以上であったのに対して、農学部は55%、医学部は26%であった。本年度、この割合が教育、法、経済、工の4学部では75%以上、農学部57%、医学部47%であった。医学部の学生の割合が増えた理由として、開講科目の変更が想定できる。昨年度まで医学部教員による主題B「医療の歴史」が前期月曜1校時で開講され、医学部学生が40名受講していた。今年度は「医療の歴史」がなくなり、後期木曜1校時で「人間と健康を考える生理学」、「生活と環境、生命を支える化学」という2つの授業が新しく医学部教員担当で開講されている。医学部学生の履修がそれぞれ33名、18名であり、開講科目の変更で、履修の動きがあったと考えられる。このような理由で回答者の学部間バランスが是正されたことは、専門に偏らない履修を促す立場にあるわれわれにとっては皮肉である。また、医学部生の回答者が増加したとはいえ、農学部、医学部の1回生の回答者が少ないと

いう課題はやはり残っている。

回答の集計に際して、学部間比較も行ったが、質問項目のすべてに関して、詳細な分析を行っているわけではない。学部間の相違については、顕著な部分のみ言及する。

3. アンケート結果の分析

3-1. 全学共通教育スタンダード及び関連項目の認知度

最初の設問群は、平成 23 年度から適用されている「全学共通教育スタンダード」及び関連項目の認知度に関わるものである。問 1～問 3 では、「全学共通教育スタンダード」（問 1）、全学共通教育スタンダードに即して設定された「全学共通教育の到達基準」（問 2）、「全学共通教育水準コード」（問 3）について、知っているかどうか、質問した。回答は「内容まで知っている」、「あることは知っている」、「全く知らない」の 3 択とした。さらに問 4 では、「全学共通科目の各科目群（主題科目、学問基礎科目、大学入門ゼミ等）固有の役割について知っていますか」という問いを立て、「よく理解している」、「ある程度理解している」、「あまり理解していない」、「全く理解していない」という 4 択で回答を求めた。

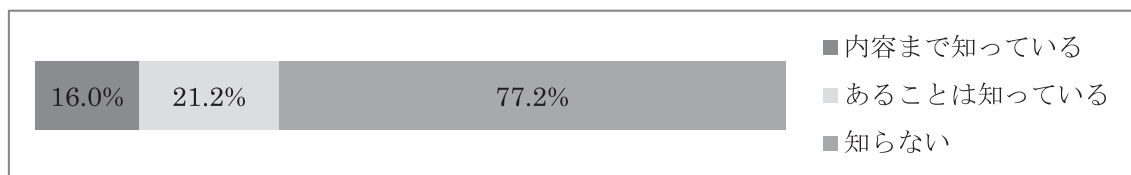


図 1 問 1 の回答（スタンダードの認知度）

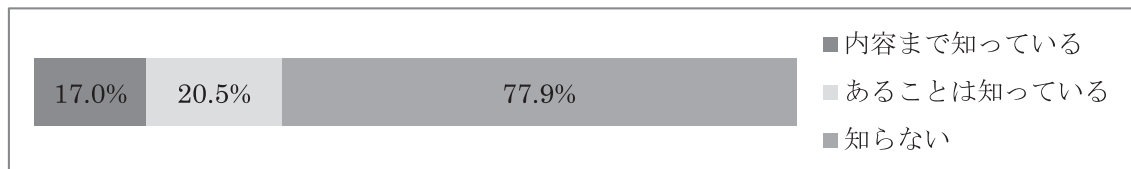


図 2 問 2 の回答（到達基準の認知度）

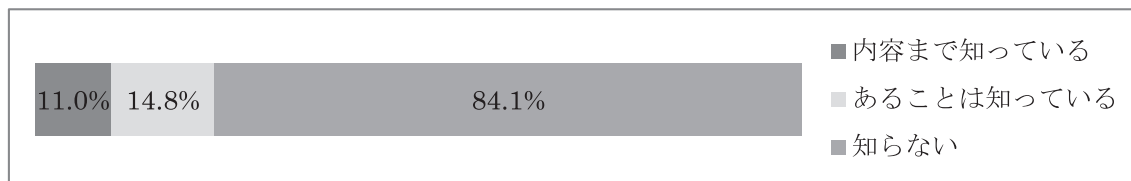


図 3 問 3 の回答（水準コードの認知度）

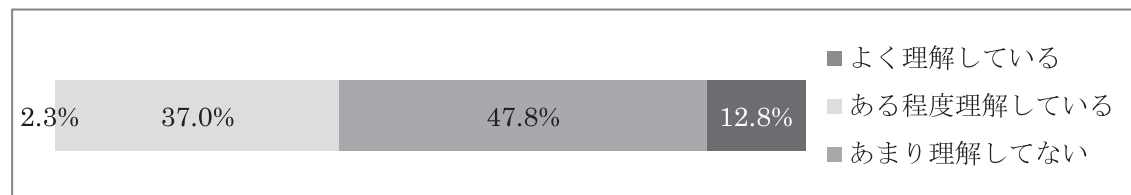


図 4 問 4 の回答（各科目群の役割の認知度）

問1のスタンダードの認知度について、「内容まで知っている」と「あることは知っている」を合わせたスコアは、昨年度（22%）とほぼ変わらない。問2の到達基準の認知度、問3の水準コードの認知度についても問1と同様のことが言える（昨年度の「内容まで知っている」＋「あることは知っている」のスコアは、問2、21%、問3、16%であった）。

問4の各科目群の役割の認知度についての質問では、「よく理解している」、「ある程度理解している」の肯定的回答が39%であり、昨年度（37%）から微増している。「あまり理解していない」は47.8%でやや減（昨年度は50%）、「まったく理解していない」も12.8%でやや減（昨年度は13%）であった。昨年度の調査結果を受けて、大学教育基盤センターでは、初年次必修科目（前期開講）である「大学入門ゼミ」の担当者に、全学共通教育スタンダードに関する周知をお願いしていた。実際にどれぐらいの教員が周知を行ったのかは確認していないが、本年度とられた対策はほとんど効果がなかったと言ってよいだろう。来年度以降、周知の方法をあらためて検討する必要があると思われる。方法として、毎年前期末行われている大学入門ゼミ受講生対象のアンケートで、スタンダード周知を目的とした質問項目（全学共通教育スタンダードの内容は、〇〇ですが、これについて知っていますか、というような質問）を追加する、ということが考えられる。相関図やリーディングリストについても同じ方法をとることが可能である。

また、特に「各科目群の役割」について言うと、そもそも教員がこのことを理解していない、また授業担当の際に、スタンダードを意識した授業デザインを意識していない、という問題もあると思われる。教員の意識調査や、教員に対する周知についても考えていかなければならない。

3-2. 全学共通科目相関図の認知度

続く問5～問8は、全学共通科目相関図の認知度に関する設問である。具体的には、問5で、相関図の認知度を問い（回答は、「知っており、参考にしている」、「知っているが、参考にしていない」、「知らない」の3件法）、これを踏まえて問6では、問5で「知っている」を選択した回答者を対象に、「全学共通科目相関図をどのように知りましたか」という質問のもとで、相関図を知る手立てについて調べた。問7では、問5で「知っているが、参考にしていない」を選択した回答者を対象に、相関図を参考にしていない理由について質問した。問8では、相関図を知っているか否かに関わらず、すべての回答者を対象として、「学問基礎科目相互の関連を理解しているか」という質問に、「よく理解している」、「ある程度理解している」、「あまり理解していない」、「全く理解していない」の4択で回答を求めた。

相関図の認知度について、問5では、「知っており参考にしている」が16.4%であり、昨年度よりやや減少している（一昨年度23%、昨年度17%）。一方「知らない」は、昨年度より増加している（一昨年度40%、昨年度19%）。相関図についての情報提供は、昨年度と同様に行っているもので、このような変動がどうして生じたのか、はっきりとはわからないが、相関図の情報を掲載している紙媒体の資料（シラバス、修学案内）を学生があまり見なくなっている、ということも考えられる。ウェブだけでシラバスの情報を収集する学生の割合が高くなっているとすれば、現在ウェブ上で行っている相関図についての情報提供の方法についても見直す必要があるかもしれない。

問6における回答の割合は、昨年度とほぼ変わらない（昨年度は、「自分で見つけた」43.0%、「入学時ガイダンス」48.1%、「授業でのアナウンス」3.1%、「友人、先輩から」4.6%、「教務システム」2.9%であった）。この割合は変わらないものの、問5からわかるように認知度自体は昨年よりも下がっ

ている。回答者全体を分母としてみると、入学時ガイダンスで相関図を知った学生の割合は3割程度であり、入学時ガイダンスの段階で相関図について情報提供を行っても、記憶に残らないということが考えられる。相関図は学問基礎科目を軸に作成されているので、学問基礎科目の授業におけるアナウンスのほうが効果的であると考えられる。授業がはじまっている時点での情報提供になる、という問題はあがあるが、こちらからの情報発信の強化を試みてもよいかもしれない。

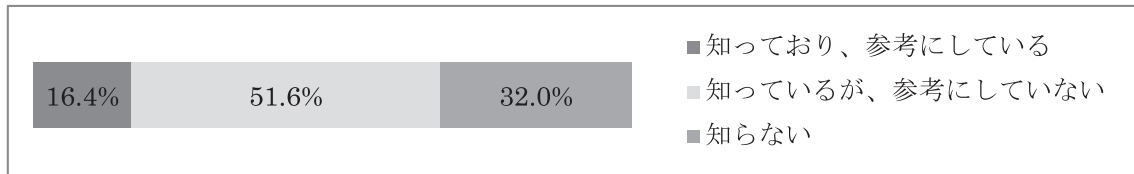


図5 問5の回答（相関図の認知度）

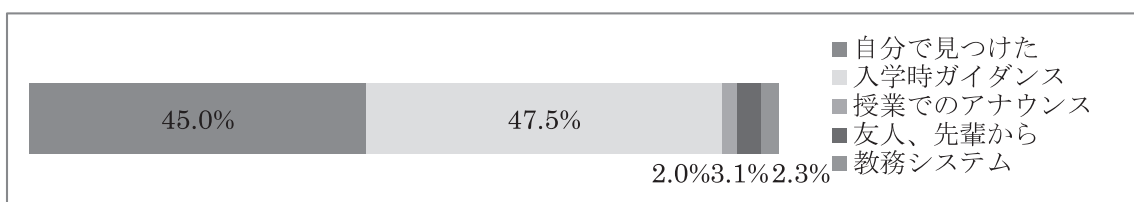


図6 問6の回答（相関図を知る手立て）

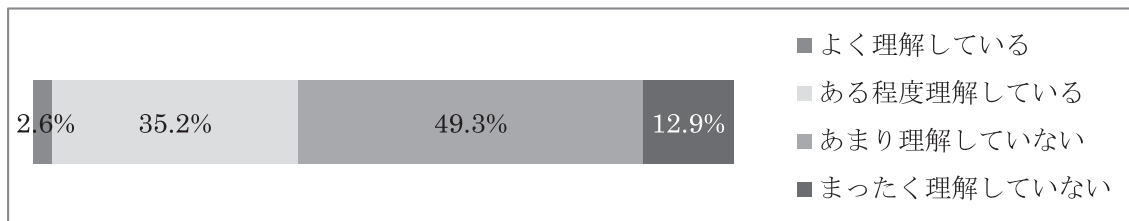


図7 問7の回答（相関図を利用しない理由）

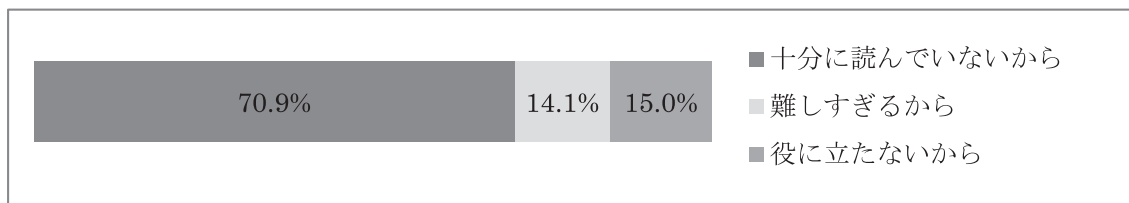


図8 問8の回答（学問基礎科目における相互関連の理解）

問7より、相関図を利用していない理由の70.9%が「十分に読んでいないから」であることがわかる。この結果から、相関図自体に問題がある、ということはすぐには読み取れない。相関図が「難しすぎる」、「役に立たない」としている回答者は、この設問の回答者全体を分母とすると、計29.1%だが、アンケート回答者全体を分母とすると14.5%である。それゆえ、相関図の内容に手を入れるよりは、まず周知の徹底、単なる認知から十分に目を通すところまで学生を導く、ということが今後の課題となるだろう。

問8について、「よく理解している」の回答は、2.6%、「ある程度理解している」の回答は35.2%であり、前者は昨年度とほぼ変化なし、後者は微増である（昨年度は、よく理解しているが2%、ある程度理解しているが32%であった）。また、「まったく理解していない」は12.9%で昨年度（13%）とほぼ変わらない。「あまり理解していない」の回答は49.3%で昨年度（53%）よりもすこし少なくなっているが、依然として5割程度を占めているので、改善が望まれる。

また、表2が示す問5と問8のクロス集計の結果より、相関図を知っている学生ほど学問基礎科目相互の関連を理解しており、知らない学生は関連を理解していない傾向が読み取れる。昨年度、一昨年度のデータでも同様な結果が出ており、「相関図の認知度」と「学問基礎科目における相互関連の理解」との関係性の強さが改めて確認されたことになる。現段階では、関係性の深さということしか言えないが、相関図の効果が確かめられれば、〈相関図の利用を通じて、学問基礎科目における相互関連の理解を深めてもらう〉、という、取るべき方策が明確化される。ただし、こういった方法で相関図の効果を検証するためには、まず相関図の認知度を一定程度まで高める必要があるだろう。

表2 問5と問8のクロス集計（相関図認知度と学問基礎科目相互関連の理解との関係）

問5. 全学共通科目相関図を知っていますか	問8. 学問基礎科目相互の関連を理解していますか				合計（N）
	よく理解している	ある程度理解している	あまり理解していない	まったく理解していない	
知っており、参考にしている	9.0%	74.0%	16.4%	0.6%	100.0%（177）
知っているが、参考にしていない	1.6%	34.1%	59.1%	5.2%	100.0%（555）
知らない	0.6%	17.4%	50.7%	31.3%	100.0%（345）

3-3. リーディングリストの認知度、利用状況

問9～問11は、今年度からの試みであるリーディングリストの認知度、利用状況についての質問である。まずリーディングリストの認知度を問い（問9）、知っている回答者には、どのように知ったのか（問10）、紹介されている本を何冊読んだか（問11）を尋ねた。これらは新規項目である。



図9 問9の回答（リーディングリストの認知度）

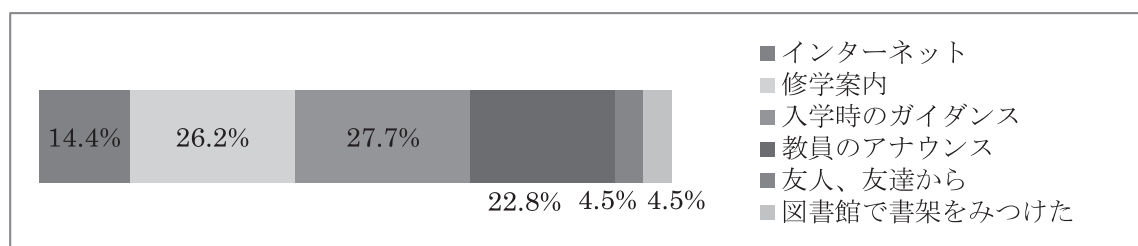


図10 問10の回答（リーディングリストを知る手立て）

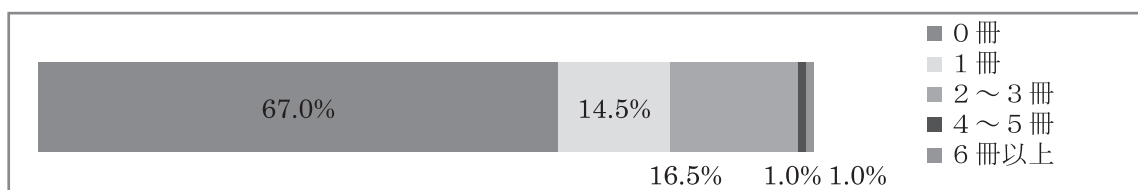


図11 問11の回答（リーディングリスト掲載図書の利用状況）

問 9 より、リーディングリストを知っている学生は、2 割に満たないこと、さらに中身まで目を通した学生は 5.7%ということが明らかとなった。リーディングリストの周知方法には、大いに改善の余地があるといえる。また問 10 より——これは相関図にもいえることだが——入学時ガイダンスでの情報提供を覚えている学生が 3 割に満たないことがわかる。入学時ガイダンスは全員に向けて一度に周知が可能というメリットはあるものの、記憶の定着という点に関して言えば、必ずしもよい情報発信の場ではない、ということであろうか。新たな情報発信方法として、新入生向け図書館ツアーとの連携、リーディングリストの冊子化、パンフレットの作成などが考えられる。昨年度は、リーディングリストで紹介された本が 5 月に配架されたため、新入生向けツアーでの情報提供を図書館にお願いすることがそもそもできなかった。来年度はこれが可能なので、図書館に依頼する予定である。冊子、パンフレットについては、図書館の貸し出し返却コーナーに置くことがまず考えられるが、新入生の図書館利用率がどれぐらいなのか図書館に問い合わせた上で、あまり利用率が低い場合は、学食など別の場所に置いたほうがよい。

問 11 の結果からは、リーディングリストをたよりにして実際に本を読んだ学生が非常に少ない、ということがわかる。人数でみると、64 名の学生が利用しているに過ぎない。

表 3 問 9 と問 11 のクロス集計（リーディングリスト閲覧と、図書利用冊数との関係）

		問 11：リーディングリストで紹介された本を何冊読んだか						合計
		無回答	0 冊	1 冊	2～3 冊	4～5 冊	6 冊以上	
問 9：リーディングリストに目を通したか	目を通した	3.3%	32.8%	16.4%	41.0%	3.3%	3.3%	100.0% (61)
	目を通していない	9.1%	74.1%	12.6%	4.2%	0.0%	0.0%	100.0% (143)

しかし、表 3 に示したように、リーディングリストに目を通した学生のうち、63.9%はリーディングリストで紹介された本を 1 冊以上読んでいる。目を通した学生には、読書のきっかけになっているようである。もともと読書への志向がある学生が、リーディングリストに目を通して、ということも言えるだろうが、目を通すことと本を手にとることの間には関連性がある、ということはいえるので、まずは、どのように知ってもらうか、どうすれば目を通してもらえるか、ということを検討することが必要である。

3-4. 履修計画を立てる際の検討材料

問 12～問 14 は、学生の履修計画を立てる際の検討材料に焦点を絞っている。履修計画を立てる際に依拠する情報（問 12）、履修計画を立てる際に読むシラバスの項目（問 13）、授業を選択する際の決め手（問 14）について問うている。この 3 つの質問では、複数の回答も可とした。

問 12 の履修計画を立てる際に依拠する情報については、概ね一昨年度、昨年度と同様な結果がでている。履修計画を立てる際にはシラバスがもっとも参照される情報源であり、先輩や友人からの情報を上回っている（昨年度は、シラバスが 85.3%で第 1 位、先輩や友人からの情報が 60.1%で第 2 位）。

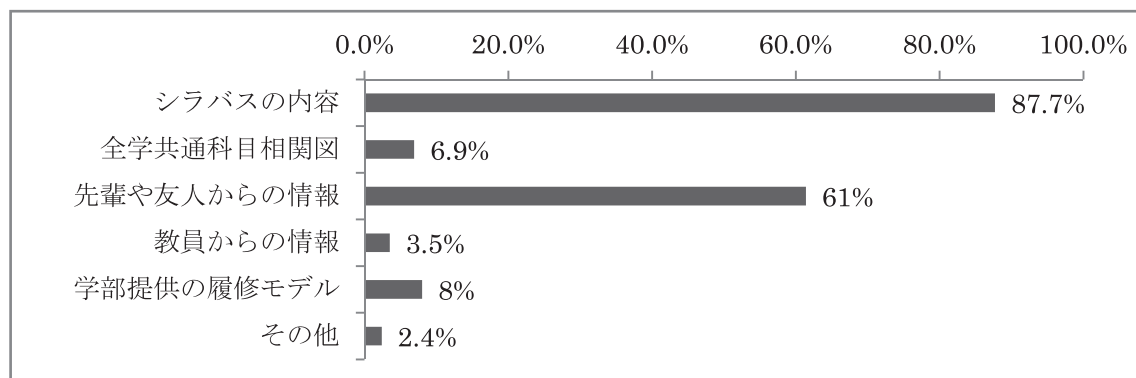


図 12 問 12 の回答（履修計画を立てる際に依拠する情報）

問 13 の履修計画を立てる際に読むシラバスの項目について、最も注目されているのは開講曜日・校時であった。次に成績評価の方法と基準が重要視されている。この項目の結果は、一昨年度、昨年度とあまり変わらない（昨年度は、開講曜日・校時が 87.3% で第 1 位、成績評価の方法と基準が 76.5% で第 2 位。）

問 14 の授業を選ぶ際の決め手について、昨年度同様な結果が得られた（昨年度は、自分の興味関心との合致が 83.2% で第一位、開講曜日・校時の都合のよさが 71.1% で第二位、試験や課題の容易さが 58.5% で第三位）。最もスコアが高いのは「自分の興味関心との合致」である。もちろん、試験や課題の容易さも重要なファクター（第 3 位）ではあるが、学生たちは、そのことを第一に考えて授業を選択していないということは、強調されてよい。

また、一昨年度、昨年度も同様であったが、文系・理系のバランスはほとんど考慮されていない。卒業要件において、一定の縛りをかける、という解決策も考えられるが、過度に成績評価を気にせず、自分の専門分野以外の授業にチャレンジできる環境が設定されているか、ということも考えなければならない。この論点は、問 14 における回答の学部間比較を行うことで、浮かび上がってくる。問 14 において、「試験や課題の容易さ」を選択している回答者は、全体では 59.4% であるが、教育学部学校教育教員養成課程の回答者は 69.1% と、比較的高いパーセンテージとなっている（ちなみに教育学部人間発達環境課程は 48.7 パーセント）。この傾向は、当該課程の 2 年次コース振り分けの際、1 年次前期の GPA が選考基準の一つであることに関連している可能性がある。この関連性についてはより詳細な分析が必要であるが、「全学共通教育において文系・理系のバランスのよい履修どのように促進するか」という問題について考える場合、学部教育の仕組みも視野に入れる必要がある、ということはいえるだろう。

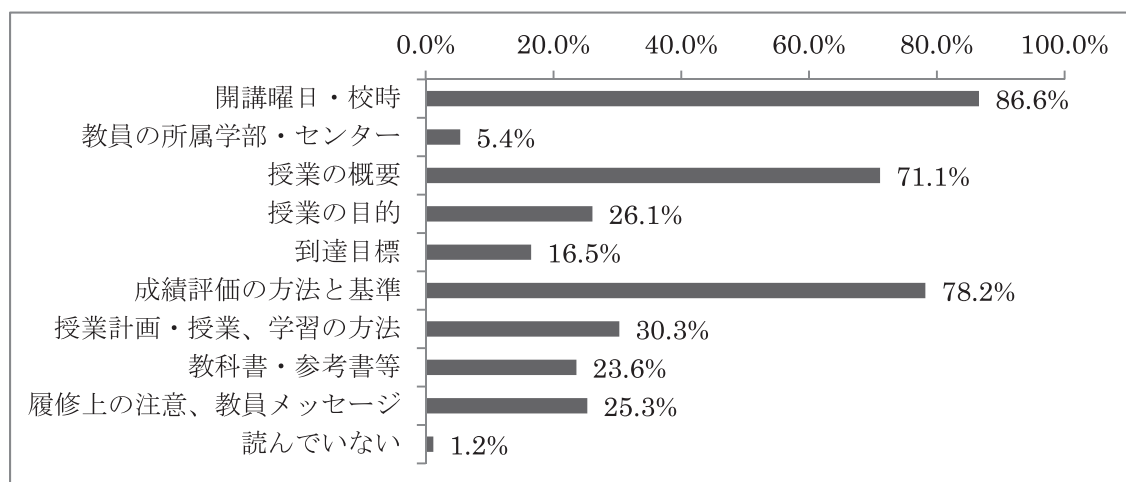


図 13 問 13 の回答（履修計画を立てる際に読むシラバスの項目）

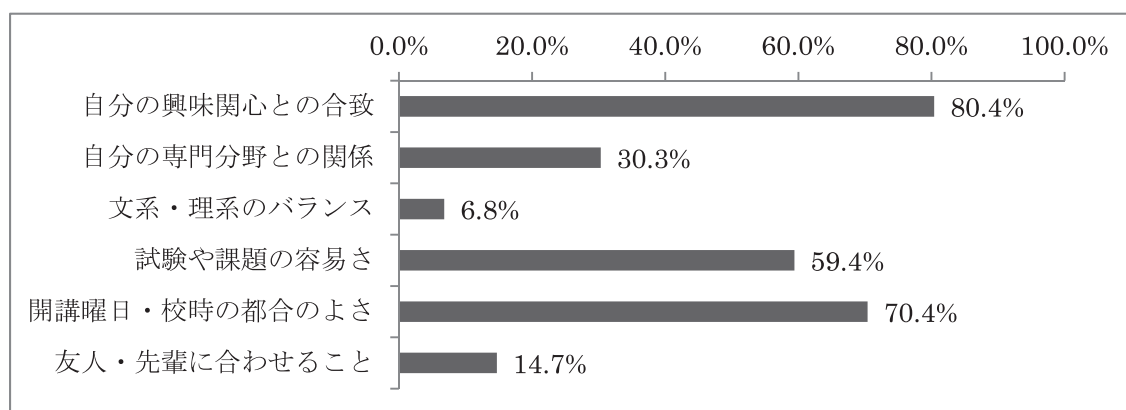


図 14 問 14 の回答（授業を選ぶ際の決め手）

3-5. 授業相互の関連づけ

問 15 では、「ある授業の学習内容について、別の授業の学習内容と関連付けて考えることがあるか」と問い、「よくある」、「ときどきある」、「ない」の 3 択で答えてもらった。

問 15 の回答の割合は、昨年度とほぼ変わらない（昨年度は「よくある」が 12%、「ない」が 21%）。表 4 が示すように、問 5 と問 15 のクロス集計の結果も一昨年度、昨年度と似通った結果となった。相関図を知っている学生は授業間の関連づけができていえるだろう。



図 15 問 15 の回答（授業相互の関連づけ）

表4 問5と問15のクロス集計（相関図の認知度と授業相互の関連の意識との関係）

問5. 全学共通科目相関図を知っていますか。	問15. ある授業の学習内容について、別の授業の学習内容と関連付けて考えることがありますか。			
	よくある	ときどきある	ない	合計
知っており、参考になっている	21.8%	67.6%	10.6%	100.0% (179)
知っているが、参考にしていない	11.1%	67.5%	21.4%	100.0% (560)
知らない	9.3%	57.7%	33.0%	100.0% (345)

4. おわりに

今回の調査によって、「相関図の認知度」が「学問基礎科目相互の関連性の理解度」や「授業相互の関連づけの意識度」と一定の相関があることが再確認されたが、肝心の認知度が昨年度に比べて1割程度低下していることも確認された。この理由は明確ではないが、認知度を高いレベルで安定させたための方策を再検討する必要があるだろう。「認知しているが参考にしていない」主な理由が、十分に読んでいないというであることが分かったが、製本された修学案内ではなく教務システムの画面でシラバスを参照している学生が増加していることを考慮すると、例えば受講登録の画面に相関図を掲載して必ず眼を通すようにさせるという方法は有効であろう。単なる認知から十分に目を通すところまで学生を導いていく方策が必要である。

共通教育スタンダードの認知については、依然として低いレベルであることが判明した。今年度は、「大学入門ゼミ」の担当者に説明を行うよう依頼したが、このような方法では実効性が得られないようである。これに代わる方法として、たとえば、「大学入門ゼミ」の最終回にスタンダードの説明を兼ねたアンケート調査を実施し、そこで事実上のスタンダードに関する理解を行う機会を設けるようにすると、一定の実効性を挙げることができないだろうか。

リーディングリストの認知度、利用状況については、初年度であり、また図書が配架されたのが5月中旬であったことなどから、低いレベルに止まっているが、教員が十分に理解していない可能性がある。学生、教員双方における認知度を上げる方策を考えていくことが課題である。ただ、リーディングリストに掲載する本の選定とコメント書きを教員に広く依頼していく中で徐々にこのリストが浸透していくことも考えられるので、焦らずに、予算問題等の難題もクリアしながら、着実にこの事業を継続していくことが重要であると考えられる。

注

- 1) 一昨年度のアンケート結果については、斉藤和也ほか（2014）「学問基礎科目相関図の効果検証」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第11号、19-25頁を、昨年度のアンケート結果については、斎藤和也ほか（2015）「平成26年度における学問基礎科目相関図の効果検証」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第12号、69-77頁を参照。
- 2) リーディングリストとは、学問基礎科目や主題科目を担当している教員が推薦する書籍のリストのこと。香川大学の場合、学問基礎科目の担当を決めるにあたって、22の科目領域が設定されている。リーディングリストの作成にあたり、科目領域ごとに5～20冊の書籍がリストアップされた。なお、リストアップされている本は、大学の図書館の特設書架に配架されている。